

先日ある女の子の学校でのたのしみについて紹介した。(16号) その女の子について担任の先生が、教えてくれた。「たのしみはないって言いますが、絶対嫌いじゃないですよ。彼女は、最近給食を全部食べられるようになったのです。がんばっていますよ。クラスみんなから拍手してもらったんです。ちなみにわたしも質問してみました。好きな教科は何？って聞いてみたら、図工って答えてくれましたよ」▼さすが担任の先生、一人ひとりの子どもたちをよく見ている。何よりも事実が湯水のごとく語られる。教師は、子どもに目をかけ、声をかけ、心をかける。だからこそ子どもが語れる▼女の子と担任の先生が語り合う情景が目には浮かんでくる。笑顔で語る担任の先生の背景に女の子の笑顔が見える▼その担任の先生は、始業式の日、好きなものが1000個あると子どもたちに話してくださった。「おやしギャグが好き」というのもその一つらしい。その1000個の中には、必ずあるだろう。もう学級の子どもたちには伝えているかもしれない▼「みんなのことだよ」初等教育に携わるものは、「子ども」と「教育」を愛しているのだ。そんな教育愛に満ちた教師100人そろっても敵わないのは、「親」だそうだ。こんな言葉があった。【親の意見と茄の花は千に一つも無駄はない】【親の意見と冷や酒は後で聞く】【学校の先生は風の人】